

「環境・共生・協働のコミュニティ ― 教会の将来 ―」研究会

## 21世紀に「内村鑑三」を生きる ～その社会的意味と意義について～

泉川 道子

「ここ（愛農）には宝が埋まっていると思ってずっと今まで（四半世紀）やって来たんですよ。そしたら今、何となく今（現代）は、ひょっとして私たち先頭にいるの??みたいな? 『土から命をいただいて、そしてそれと触れ合うことのできる 365日の環境を教育現場として、こども達に提供して、で、それを体得した子達が卒業してそういう小さな（農的）共同体をそれぞれの場所で作り始めている。』すごい学校だな、、、みたいな」(愛農 pv より)

愛農高校の卒業生たちは、全国津々浦々から色々な興味や関心で三重県にある本校に入学し、3年間農業三昧の中寮生活を過ごし、そして卒業していった先で、小さな自立した農業者としての共同体をつくっていています（全員ではありませんが）。その土地とそれまで全く馴染みのなかった卒業生も、その土地でずっと農業をしていた同級生や先輩、後輩と共につながりあいを持ち、初めてその土地にやって来た彼らと共に、農業が実践できる状況が準備できるのが、小さいけれども、私たちの強みだなというふうに思っています。

不安もあるでしょうが、愛農高校在校中に共に汗を流し、苦楽を共にしたもの同士だからこそ、乗り越えられたり、損得なしで支えあえたりする現状があるのだと考えます。お金はなくとも、そういう風に生きている人は皆生き生きと自信を持って農作業しています。皆、それぞれが自立しており、工夫して自分なりの生き方を主体的に模索しているのです。

故・小谷純一は1910年生まれですので、終戦の時ちょうど35歳でした。京都大学の農学部を卒業しており、生家はコテコテの浄土真宗の家でしたが、京都大学時代に聖書と出会って、熱心なキリスト教徒になります。戦争が終わった後は和歌山県の師範学校で教鞭をとっていましたが、自ら食糧を作って飢餓から人々を救わなければ、という強い信念のもと、教師を辞め、和歌山の実家で農業を始めるわけです。すごく魅力的な人だったのだらうと思います。理由は、先生が辞めて和歌山に帰るんだったら、自分らも一緒に農業をやりたいと言って、何人かの子たちが師範学校をやめてついていったみたいで、瞬間に何十人、何百人というふうにその数は増えて行くんですね。愛農生活をこども達と共に過ごしているとよくわかることですが、彼らは口ばかりで何も行動に移さない人には一目置いたりしません。無口であろうが、少々言い方が間違っ

ていようが黙々と、コツコツと実践する大人の背中を追いかけ、敬意を示し、目標とするのです。多分小谷先生もそのような方だったのではないかと想像します（雄弁な方だったので無口ではなかったと思いますが）。愛農会という、最初は愛農根本道場という呼称ですね。そういう名前とか、花嫁大学講座とか、今聞いたらのけぞるような誤解を生みがちな言い方が、小谷先生の文章を読んでいるとどんどん出てくるのですが、そのぐらい農村の維持とか家父長制とか、そういうのがもう自然に疑いようもなく農村にはあって、そういう時代の中でこれらの言い方は、当時の農村社会で用いて行く上で切っても切り離せない言葉として存在していたのではないかと感じています。小谷先生はただ単に一生懸命なだけだったんだらうなど、私は今は思っています。

1972年に梁瀬義亮という奈良県の医師で入学して来た生徒の保護者に出会って、その梁瀬義亮さんが、「このまま日本の農業者が農薬を使い続けたら、20年後には4人に1人が癌で死ぬだろう」という言葉をおっしゃったのです。小谷はそれを真摯に受け止めて、1972年以降は全面的に愛農の耕種栽培を有機農業に転換します。愛農高校は、今年で60年の歴史を持っているわけですが、最初の10年間（1963～1973年）というのは創生期。その次の11期から30期（73～93年）までの20年というのは転換期であったと分析します。有機農業に変わるといっても、そんなにたやすくはないですよ。土中から農薬の成分を完全に撤去するにはそれなりの年月がかかります。小谷は1期生で当時明治学院大学で教鞭をとっていた奥田信夫元校長に声をかけ、ヘッドハンティングして来て、彼を中心にして少しずつ、土の入れ替えからしていきました。昔のキャンパスはハエがたくさんいたそうです。職員の家でも、家庭訪問で小学校の先生が来たら、出したお菓子里にハエがばーっとたかって真っ黒になって、すごく恥ずかしかったとか、そういう話なんかも聞いたりします。相当根気の要る、それこそ神様からのミッションと承らなければ今の私にはできないと思うほど大変な挑戦だったと思います。

そういうふうにして転換して行って、1993年から2003年ごろ。私は1998年から勤め始めていますから、当時の教育現場を振り返ると、ちょうど尾崎豊の「十五の夜」、バイクで走ったり窓ガラスを全部割ったり、そういう校内暴力なども社会問題として新聞を賑わしていた時代で、ご多分に漏れず愛農高校の寮でも暴力事件とか、裁判沙汰になったりとか、そういうこともあって、先生方がすごく苦労されていたみたいでした。志はすごく高い学校でした。私も、すごくすてきな学校だと思って98年に就職したのですが、入ってみたら盗みはあるわ、暴力はあるわ、先輩から後輩への使役はあるわで、「えー？ この学校どうなってるの？」という感じでした。にも関わらず、子どもたち自身はすごく純粋な魂を持っていますし、本当に何とかしないと思っていましたね。

私としては、「神、人、土を愛する」学校なのに、人があまり愛されていないなと感じて、全面的に生徒と向き合って、生徒の声を聞くことをすごく意識していた時代でした。

2003年ぐらいから徐々になのですが、変化が訪れます。2005年に朝日新聞が第6回の「明日への環境賞」という賞を本校にくださいます、それをきっかけにまずは職員が自信を持ち始めたのではないかと思います。それまでは職員もみんな下を向いて毎日過ごしていて、一生懸命頑張っているのに、全然報われない。農業なんか「臭い、汚い、危険=3K」とか言われているので、誰からも顧みられなかった時代に、小谷先生の理念だけでやって来ていて、皆うつむいていたのですが、そんな職員にも、「明日への環境賞」を受賞できた事で社会が私たちの教育の価値を少しでも認め始めたということが、第2の転換期を導いていったのではないかなと思います。(創立者小谷は2004年に、「環境省受賞」を知らず世界)

いろんな賞をいただいて、やはり一番の転換は3.11. だったんじゃないかと、私は思います。それまでの価値観というか、きれいなもの、おいしいもの、それから高価なもの、形の整ったものを求めているそれまでの消費者が、本当にこれで良いのか?と立ち止まり始めた。目に見えない放射能の汚染に気が付いて。お母さん方が最初に気が付きましたね。子どもたちが食べるものによって鼻血が出るとか、症状が出るということで、目に見えないけれども、食べ物っていかに大事かということに気が付き始めて、たくさんの方が福島から移動されて、そして、デトックスのために無農薬のものを食べたり、自然の中でお日さまの光を浴びて遊ばせたりということが始まってきて、目に見えないけれども、食べ物の中に本当に命を生かす大切さがあるということ、一般の方々も認識せざるを得ない時代が、2011年3月11日以降やって来たのかなと思ったりしています。

### 愛農高校60年 (Since 1963~)

- ①1963-1973(創立当初:1期生~10期生)
- ②1973-1993(転換期:11期生~30期生)
- ③1993-2003(苦難の時代:30期生~40期生)
- ④2003-2013(社会的認知の始まり〔第2転換期〕:41期生~50期生)
- ⑤2013-現在(社会的貢献の時代・農業の持つ教育力をアピールする時代)

(スライド 21)

小谷の人生は、20年ぐらい内村鑑三先生とかぶっているんですけども、直接知っているということはなかったようです。むしろ内村の弟子の高橋三郎先生が、小谷の活動を、物心共にすごく応援してくださいました。教会員の皆さんからお金も集めてくださって、献金をくださったりすることで、学校の宿舎、職員住宅ができたのだと聞いています。なので、小谷と無教会の高橋先生はそういう交流をする中で絆を深め合っていたのではないかと思います。



小谷先生が常におっしゃっていたのが、人づくりは家づくり、家づくりは村づくり、村づくりは国づくりということです。高校で人間を教育するとはどういうことか、それは各々の村にとってなくてはならない人材というか人格者を育てることなのだと、亡くなるまでずっとおっしゃっていました。だから、一人一人の生徒を大切に、しっかりと目をかけ手をかけ心をかけて育てていく。それが家づくりになり、村づくりになり、その末には国づくりとして、日本全国47都道府県に1人ずつでも、そういう志の高い卒業生がいてくれたら、日本の農業は救われると、言われるのです。そんな話をしたら2時間ぐらい止まらない。私が初めてお会いした時は、唾をいっぱい飛ばしながら話す、おじいちゃん先生だったんですが、そういうことをずっとおっしゃっていました。彼は2004年に94歳で亡くなるんですが、私は88歳から94歳まで一緒に過ごさせていただきました。今では、ご存命のときの先生を知る数少ない1人となってしまいました。

今、私たちが小谷の活動を受け継いで何ができるかと思っているかということ、同じように生徒にしっかりと向き合うということに尽きるのではないのでしょうか。とにかく3年間、ここ愛農高校・愛農が丘という場所で、一緒に過ごすことで農的生き方が幸福だということの真理を分かち合うということ。愛農にいる間に、農家実習に

行くんですね。卒業生で農業をやっている人たちのところに行くわけです。そうすると、そこであまりよくない武勇伝などを聞くこともあります。でも、やっぱり小谷の教えがあるからか、なぜ自分は有機農業を、村の中で四面楚歌に遭ったりしながらもやっているかとか、そういういろんなことを聞いて、農業実習して生徒たちが帰ってくる。そういう行ったり来たりの中で、小谷は「農業が好きで好きでたまらない生徒をつくる」という形で愛農高校を立ち上げたわけですが、皆有機農業の醜態に染められて行くわけです(笑)。愛農高校のカリキュラム自体がそうなっているんです。だから、最初は農業をやるつもりで愛農に入学した子でなくても、卒業するときには「農業やりたいな」となってしまうんです。そういうコミュニティがあって、真ん中に愛農があって、そして愛農のネットワークを行き来する中で、非農家から来た子が愛農を卒業して、愛農関係の農家さんに就農したり、農業法人に働きにいたり、そういうことが結構起こったりしています。すごく面白いと思います。

(動画上映より)

- ： スタートが、農業で若者に教えるというところがありました。しかし、もう一つの柱としては、キリスト教の、聖書の信仰に基づいて、農業を伝えるという、この2つの柱で(愛農高校は)始まりました。(村上守行現校長の言葉)
- ： ここで自分は何かできるかもしれへんっていうグッとしたものがあるかどうかというのが愛農で楽しく生きていける(コツかなと)、そしてできることが多くなっていくということなんだと思う。(果樹部・近藤百教諭の言葉)

教頭になる2017年まで約20年間ずっと、私は毎年毎年担任をやってきました。1学年20人前後ですが、担任をやると家族みたいというか、本当にいろんな子との出会いを与えられます。いろんな家庭から来ている子がいて、いろんな困り感を持ったり、心の闇を抱えている子がいたりします。やっぱり15歳から寮生活を始めるということは、大変なことです。15歳までにその根っこというか、親から愛されるという根源的な愛を受ける経験をしていない子が、15歳からいきなり寮生活を始めるということは、本当に難しいことなのだ実感させられてきました。それまでの育ちの中に、これからの成長の芽を見いだすことが学園生活を充実させる上で欠かせないことだと、今では認識しています。未来への村づくりを想定しているからこそ入試の制度を絞って、愛農高校で自立した人間として育ていく芽を持っている子に入ってもらえる努力を現在ではしているつもりです。

経営的には、25名採れないと、とても大変です。でも、そこにこだわり過ぎると、もっと大変なことになることが結構あって、血も涙もないような考え方もかもしれませんが、入試の時点でそのお子さんが卒業後も何らかの社会的ケアが必要だとあらかじめ見極められる生徒には、本校は入学を勧めていません。こういう精神的にも実務的にも大人の細やかなサポートが継続的に必要な10代後半の子どもたちの居場所って本当に少ないんです。だからこそそうした「グレーゾーン」と呼ばれるお子さん方に特化した「学びの場」が制度的にも必要だと感じています。(実は私自身の子ども(現在中学3年生)もその一人なのですが。)けれども今の愛農高校の教育理念と経営のキャパシティーではそこに注力する力がないのです。愛農高校は愛農高校で農業自営者育成校としての助成を受けてやっているので、そのことに特化した教育を模索する。だから、18歳以降も社会的サポートが必要なお子さんへの教育は愛農ではできないことを私たちが自分に言い聞かせる。少なくとも私には自分に言い聞かせる必要がありました。どこまでも追いかけてケアしていってしまう性質を私は持っています。ですので、愛農に入学した生徒さんとは教職員は彼らを支える杖として、3年間一緒に歩いて、3年たったあとに杖なしで歩けるように、そして、卒業後はキリストに杖を託していく、というふうに、歩めれば一番いいなと思いつつ、生徒と接しています。なかなか洗礼まで至る子はいませんが。まあそれでも、キリスト教ってこんなものだよと思ってもらえるような、卒業の仕方をしてくれればいいなと思いつつ、やっています。

〈約20年の担任業から得た実感〉

- ・教師は三年間その子と共に歩くための杖となる。前提として卒業後杖なしで歩けるように。(卒業後も杖が必要だと予め見極められる生徒には入学をすすめない)
- ・杖をキリストとして歩めるとより良い。
- ・ルールを破って罰してもそれは「本人を否定しているからではない」と本人が思える」関係性を構築することが大切
- ・医療と教育の役割の違い→

医療 = 「妨げ」を低減

教育 = 「妨げ」があっても生きる力や工夫する力を育てる

(スライド 24)

現代のティーンズはすごく不安定で自信がない。日本の教育は15歳までに自己肯定感を育ててきていないのです、生きていく上での一番大切な秘訣なのに。それは、G7のどの国の中でも最下位で、日本の国の教育の課題です。だから、本校

では、愛農生に対してまず先生、大人が信頼関係を育める関係づくりをして欲しいと、教頭になった私は教職員の皆さんに伝えています。

この(スライド24)、最後の医療と教育の役割の違いというのは、私も職員研修のときに杉山先生という、発達障がい児教育の研究者から伺って、これは心にとめておこうと思った言葉です。医療というのは、妨げを低減するもの。教育というのは、その妨げがあっても、生きる力や工夫する力を育てる。発達障がいですよとか、自閉症スペクトラムですよとか、そういうお子さんがいらっしゃるのですが、それがあって、じゃあ、それらの「困り感」と共にどう生きていけるか。常に課題ではあるのですが、本校の場合それは、本当に不思議というかありがたいことに、寮生活の中で、自分は大丈夫と思えるようになっていくんです。これはもう本当にすごいなあと。先生ができることはほとんどないですね。友達同士、先輩後輩、寮の中で、彼らが褒めあって、尊重しあって、自分自身の肯定感を強めていっているという現実があります。

ちょっと続きを見てみましょう。

(動画上映より)

- ： まあ、目標なくてもいいかなって思うんですけど、目標があると、すごい生活の色が変わるといふか。(H君)
- ： 農業っていう生き方がいいなってすごく思ってた。有機農業を学びに愛農に来て。(Gさん)
- ： やっぱ入学してきてからずっと触っていたんですね、ブタを。もうずっとなでて。暇があればブタを撫でてたんですけど。ブタの鼻を撫でるのがすごい好きで、それでもうずっと撫でてたら、あっちもやっぱり近寄ってくるようになって。やっぱ個体差といふか、ブタでそれぞれあるんですけど。ブタの心とか体の面にも配慮した農場をつくりたいなって思ってます。(H君)
- ： 農業っていうよりは人間関係といふか。(M君)
- ： 農業っていうより濃い人間関係とか、それ以外のものを学んだのかなって思いますね。(Nさん)
- ： 愛農に来られる方がよくおっしゃるんですけど、誰が先生で生徒か分からないですよって、皆さんおっしゃるんです。それがすごく嬉しいっていふか。(泉川)
- ： 先生と生徒の距離が近い。僕的には、いい大人との関係を築けてると思うんで、この愛農で。(M君)
- ： (先生と生徒というよりも)むしろ一緒に何かやりながら、ちょっと失敗

しそうになったら、こうしたほうがいいよと言って助けてあげる。(泉川)  
——： 助けてって言ったら助けてくれる人がたくさんいて、それが仲間で、ほんとにいいなって思いますね。(Nさん)

今話してくれた4人は全て撮影時に高校3年生だった生徒の皆さんですけれども、その中の1人は韓国からの留学生です。韓国からは延べ10名ほど今までに留学生が来ていますが、女子の留学生ではGさんが初めてだったんです。彼女が愛農に入った途端にコロナが始まってしまって、結局彼女は、一番最初の夏休みに1回帰ったきり、卒業するまで韓国には一度も帰れませんでした。けれども、3年間いる中で、自分はノルウェーのフォルケホイスコールに行って、もっと共同生活の勉強をしたいということで、ノルウェーのフォルケのコースを先日終え、今はスペインにいます。そんな感じているのが韓国のGさん。

それから、ブタの鼻を触っていた子は、今インドのアラハバードというところに行っています。すてきなブタ飼いになってほしいなと思っています。

もう1人の男子M君は、愛農に入ってきた時に、みんなと一緒に食事ができなかったんです。お父さんからDVを受けていて、それは実のお父さんでもないし、お母さんもM君を守りきれなくて。お母さんもDV夫の妻なので、PTSDなど傷を受けつつも必死で働いてM君を育てていらっしやる。そういうご家庭のお子さんでした。3年間一緒に寮で過ごす中で、本当に信頼できる友達や大人と出会って、そして今は農業者になりたいと言っていてくれます。彼は4年目にあたる本校の専攻科制度を使って、京都府伊根町の卒業生の農家さんに1年お世話になって。その農家さんは「2年いてくれ。2年いてくれるんやったら、専攻科の分の授業料はうちで出す」ということで、今2年目の研修生活をしていています。たぶんこのまま伊根町にいて、農業を続けてくれるんじゃないかなと、私は思っています。まあそう上手くもいかないのですが。

もう1人のNさんという女の子。彼女は専攻科に行ったんですが、専攻科に行ってから信頼関係をくじくような出来事に遭ってしまって、愛農にいるときに1度は大人との間に、いいコミュニケーションのツールを見つけたのですが、今はまたちょっと心を閉ざしている状態です。だから、今の世の中で、いろいろな意味で若いお子さんたちがいかに生きることに難しさを感じているかということ、私たちはもっと知って、関わっていかなくてはな、と思わされます。卒業してからも液晶ではなく、土に触れと発言していきたいとも思ったりしています。

(動画上映)

——： 学校側としては教育機関です。でも、暮らしてる人間、僕らとか彼らとか、基

本的にみんな一緒に、同じ敷地の中に愛農高校では住んでいます。(近藤教諭)

- ： うん、なんだ自分の弱いところを出しても平気なんだ。とか、あ、全部自分のことバレてるってんだっていう、ね、俺の弱いところばれちゃう。でもそれで平気なんだっていう。それが寮生活の魅力。(男子寮監・岡崎卓生教諭)
- ： フォルケホイスコールっていう学校に1年間行く予定なんですけど、そこに行こうと思ったのは、やっぱり愛農での寮生活とか共同体で、あと若い人たちと一緒に共に生活しながら学ぶっていうのが、すごく、私には、この3年間ではまだまだ足りなかったんで、これからもそういう生活、寮生活などをして、いろんな人と関わって生きていきたいなと思ってます。(Gさん)

♪探しに行こう、刻んだ日々の翳りゆく景色、移りゆく今 あなた

さあ、歌って、見える先へ さあ歌って、今日は少し知れて良かった♪

- ： ピンとくるかこないかは分かったらと思うし、その直感を大事にしてもらいたいなというのが、今進路をどうしようかなと悩んでいる皆さんに、今日お伝えしたいことです。(泉川) ~♪探し行こう♪~

ちなみにこのPVのBGMも、生徒が自分で歌詞も作って、ギターも弾いて、ハーモニーも付けてやってくれました。私は先ほど、愛農だからこそ、愛農でしかできないことを、と言いましたが、やっぱりこういう愛農のような環境が本当に必要かどうか、こういう環境をもっと日本中いろいろな所につくっていく事で、少しでもこの国が本来あるべき方向に向かわないだろうかと考えるのです。キリスト教の学校の、同盟校の先生方が2023年6月に聖書科の研修会を愛農で開いてくださったのですが、皆さんさまざまなヒントをこれからの学校教育の手法に生かすべく獲得して帰られたのではないかと勝手に自負しています。教育現場だけでなく、農業も医療も、食の循環も学校も、市町も村々も、あえて小さな共同体に目を向けるというか。小ささに価値を見出すというか。今までの数を増やすこと、大きいこと、たくさんなことに良さがあるという価値観から、一つ一つは小さいけれども、根っこが繋がっているというか、そういう共同体づくり。そして、内村鑑三と新渡戸稲造の恵迪寮時代の写真(スライド31)も出したのですが。あの札幌農学校での、恵迪寮での共同生活から、日本の次の時代を興していく人たちがたくさん出たということの中に、やっぱり何かヒントがあるのではないかとと思っています。

## 札幌農学校・恵迪（けいてき）寮



(スライド 31)

この山上国際寮のニュースレターを私も読ませていただいたんですが、個室があって一人一人スマホを持っているというところから、そこからで良いので、あえてみんなで同じ釜の飯を食べる。一緒にご飯を作って、そしてその食材は一緒に畑で働いて、一緒に汗を流して食材を自分たちで得て、それを食す、という場づくり。そっちの方向に向かってみるのはどうでしょうか。大変ではありますが、楽しみながらやってみたら案外シンプルで達成感がある出来事となるかもしれません。愛農生の皆さんたちがすごく楽しそうに農作業をして、そこから自分自身のアイデンティティーとか誇りを培っている様子を目の当たりにしています。特に2月は、3年生がこれまで実習をしていた農場からの後輩への引き継ぎの時期で、3月1日が卒業式なのでほとんど3年生は3学期農場に入れなくなって、それと交代して1年生が、自分の農場を決めて、部門を決めて、養鶏部だったり酪農部に入ってきます。そうすると、2年生が、それまでは3年生に任せ切りなのですが、途端にぐぐぐと伸びるんです。そして、今まで3年生から習ってきたことを1年生に教えるようになっていく。そういう仕組みというか、隠れたカリキュラムというか、そういうものが本校の農業教育には用意されていて、さっきもちょっと出ましたけど、大人は、ちょっと危ないときとか、何か助けが必要だというときだけ、バツと助ける。大体は愛農生を信頼し任せる、でも、見ている、見ておかないと危険を見逃してしまいます。見ておかないと分からないですよ、いつが危険なのか。その独特な距離感が十代の若者を育てるのだと思います。

放置と見守りは違う。私はよく言うんですが、放置はしない。見守っていない

と、本当に危ない時がいつか分からない。気づかない。生徒が、言うてはいけないことを言っちゃった時がいつか、ちゃんと耳を澄ましていないと分からないよねと、先生たちに言っています。一人の大人が見守れる数の限界ってありますよね。私が愛農に来る前、聖書の非常勤講師をあるキリスト教学校でしていたのですが、その学校は生徒が1クラスに49人いました。子どもたち一人一人の状態なんか49人いたら把握できません。だから、経営的には大変ではありますが、組織を小さくして少なくなってきた子どもたち一人一人を丁寧に距離感を保ちつつ見守り、出来た時に褒めていくという関係性作りが今の時代の教育には本当に必要だと思うんです。今からの時代をサバイブできる自立した大人へと育てていくためには余計にそのような仕組みが必要だと思うわけです。だから、教育のあり方とか、人としてどういう育ちが人格を形成するのか、とかどういう環境が人間を育てるのかとか、そういうことに、もっと私たちは気持ちを向けて、真剣に向き合っていけないといけないと思います。1人1台パソコンを持たせようと、国はしているみたいですが、いやいや、1人1台パソコンを持って何をやるの？ インターネットがあればいろんなことがたくさんできるでしょう。けれども、私は、PCを与えて自由に勉強しなさいというくらいだったら、1クラス20人、25人にして、大人が子どもと関わる範囲を増やして、そして手と手で、目と鼻と口と、五感で、一緒に農作業をしながら気持ちを分かち合って学び合おうと、いったような学校運営をしていくほうがいいなと感じます。そのほうが言葉を使ったり、表情を使ったりするやり取りが育っていくのではないかと、思ったりしています。すごく大きな波が愛農にも来ていて、県の私学課からはIT、ITと言われますが、私は古いのかもしれませんが、何だかなと、こういうのが苦手だからかもしれないのですが。

ちょっと補足というか、そこまではできていないのですが。小谷は、農業よりもさらに大事なことは、平和を実現していくことだと言っていました。持続可能な再生農業を目指しつつ、平和な社会をつくっていくことの大切さを常に訴えておられました。農業だけでなく、平和な社会の持続可能性ということで、愛農の建物も県産材で、先輩たちがこうやって演習林で切ってきた木を使って壁や家具を作ったり、あとは天ぷら油を集めてトラクターを動かしたり、ソーラー発電をしたり。ちょっとですけど、そんなこともやったりしているのと、後は毎年修学旅行で沖縄に行っています。修学旅行ですけども、沖縄にはだいたい毎年6月23日を挟んで1週間ほど行きます。ぎのわんセミナーハウスにお世話になって、いろんな平和学習をしています。

こんな小さな学校で、お礼もちゃんと払えないのですが、内田樹さんとか、高橋源一郎さんとか、来てくださって、話をしてくださいませ。そういうふう以外から、普段は絶対に聞けないような方のお話を聞いたりするのも、子どもたちにとってはかなりいい刺激になって、内面を育んでくれています。

課題は生徒募集です。何とか1学年25名採りたいのですが、先ほども申し上げましたように、愛農高校をある程度は自立した高校生の生活場所としていかねばなりません。結局苦勞するのは一緒に生活する子どもたちなので。同じ部屋に入ったけど、ごみが捨てられないとか、想定外のことを、1年生がやるんだとかなったら、同室の先輩とかがすごく苦勞するので、ある程度、この子に共同生活はちょっと厳しいよねというお子さんは、お断りさせていただいています。なので、もっと分母を増やしたい。50人ぐらいは受けてほしいなと思いつつながら、毎年受験者数は30人前後くらいなんですけれども。

全寮制であるということ、農業高校であるということ、それからキリスト教を教えているということ。以前の校長もこれは学校存続の上での三重苦だとおっしゃっていました。最近の生徒募集の壁はやはり携帯やスマホ、ゲームが持ち込めないということ。この4つが本当に四重苦なんですけれども、それを逆転の発想で、全寮制だからこそ人間関係が深く学べるとか、農業は最先端の学びの分野なんだということで、農の持つ教育力、そして有機農業の実践から導かれる、豊かで幸福な人生をおくれるという事を多くの人に伝えたいと思います。卒業生の何人もが6人も7人も子どものいる家庭を築いており、「先生、食べるもん、なんぼでもあるから、なんぼでも子育てできるわ。心配ない」と言ってくれていて、すごいと思うんです。無農薬のおいしい食べ物をいっぱい食べて、たくさん子どもたちと幸せに暮らしている卒業生が各地に散らばって幸せに生きている。そういう卒業生を見ると、小谷純一の教育は本物だなと思います。

聖書を土台として生きる。私は、共同体づくりは聖書じゃなくてもいいと思います。真言宗とか南無阿弥陀仏でもいいと思います。人間を超えた大きな力の存在に、私たちは常に目を向けて、共同体づくりをしていく。アイヌでもそうですよね。神様の声を聞くことを常に大事にしていた。そういう自立した幸福の村づくりには欠かせないのが一部の人にとっては聖書なんです、愛農高校の生活においてはそうです。あとは、携帯やゲームを学園にいる間は禁止しているということ、バーチャルではないリアルを体験できる環境が愛農にはありますよ、すごいでしょう、という、みんなが「えー」と言うような四重苦(笑)を、これから

も大事にしていけたらうれしいなと思いますし、持続可能な社会の実現に向けて、未来を担う若者を育てる学び舎でありたいと思います。(スライド40)

たくさんのご専門の方々がいらっしゃる前で恐縮ですが、北原茂実先生という八王子の病院のお医者さまが、『医療進化論』という本の中で、「医療は人に癒しを与えるもの。免疫を一番上げるのは心だ。だから、対人関係のストレスが人を殺している」とおっしゃっていました。私たちが普段何気なく使う言葉だったり態度だったりがいかに、人を傷付けあったり、不信感が生まれたり、そのことで争いの種ができていたりしているのだろうか、北原先生の講演から自らの言動を反省し見直す機会を与えていただきました。

実は、私ごとになりますが、うちの父も、ルーテル教会の総会議長をしていたときにある信徒さんから糾弾されて、議長としての責任もあるし、教会の一牧師としての責任もあるし、すごく窮地に立たされたことがありました。彼は教会の牧師として、信徒を二分させてしまった、信徒の人たちに懐疑心を与えたことを、一番苦しいこととしたのではないかと思います。それが癌の種になったのではないかと、私は思っているのですが、結果的に胃癌になって全摘したのですが、急性の胃癌だったので、抗癌剤の治療もむなしく10年前に他界しました。そんな感じで、対人関係のストレスというのは、私も気を付けなければと思って、皆さんもぜひ気を付けて、心臓に毛をもじゃもじゃ生やしていただきたいと。できれば人があったかくなるような、うれしくなるような言葉や態度を用いて、生きていきたいと思っています。

そういう形で、私は教会の子として生まれて、み言葉を語ったり正義をかざすことが、正だ、正しいみたいな部分もたくさんあったと思います。うちの母は、私を教会の子として育てる上で、あの人にああ言われるからとか、この人がこう思うからみたいなことで、私にすごく厳しくいろんなことを言って、思春期は母とすごい対立をしていました。だからこそ、今高校生の気持ちがよく分かるという部分もあります。本来信仰というのは、もっともっと人間を自由に、幸福にしてくれるものだと思いますし、神様から与えていただいた素晴らしいこの地球、大地を、私たちは本当に大切に、次の世代にバトンタッチしていかなくてはならない。だけど、私たちのせいでひょっとしたらこの地球環境が壊滅してしまうかもしれない。そういう現実が今あるときに、私という存在を愛農という場所に置いてくださっている大きな力に従いつつ、自分自身の人生も謳歌しつつ、神に聞くことを忘れずに歩んでいきたいと思っています。

神さまの愛を受け、土に根ざし、農的暮らしの中に愛と平和に基づいた共同体を実現していく。

・北原茂実氏→医療進化論

『食と健康から考えるまちづくり』講演会より

「医療は人に癒しを与えるもの、免疫を一番あげるのは心、対人関係のストレスが人を殺している。」

- ・食と農で健康を考える（見える伝道）
- ・心の状態から健康を考える（見えない伝道）
- ・健全な組織であり続けること（神の義と愛に立つ）
- ・日々の営みを妥協せず誠実にこなしていくこと（祈りと黙想を大切に）

（スライド 41）

最後に、今後の人生で自分の生き方の羅針盤としていきたい4つのポイントを挙げて私の話を終わりとします。

1) 食と農で健康を考える。2) 心の状態から健康を考える。3) 愛農高校が健全な組織であり続けるために努力し続ける。4) 日々の営みを妥協せず誠実にこなしていく。これは本当に祈りと黙想を大切に。そしてその為には私なりに賛美を忘れずにいたい。このあいだ植松さんの賛美を聞いて、本当に心に染みわたりました。あと5分だけありますので、私もソングリーダーとして教育を受けましたので、最後に皆さんで賛美して終わりたいと思うわけです。簡単な曲ですから覚えてくださいね。

『キリストの平和』です。「キリストの平和が私たちの心のすみずみにまで行き渡りますように」。こういう詩です。（歌）

♪キリストの平和が私たちの心のすみずみにまで行き渡りますように♪  
はい、ご一緒に。

ご清聴ありがとうございました。



↳ 愛農学園農業高等学校 <https://ainogakuen.ed.jp>

\* HPを開き、下方へスクロールしていただければ愛農PVをご覧いただけます。